

〈報告〉

同朋大学社会福祉学部 平成29年度大学教育改革推進事業

「中部圏教育改革ネットワーク」 (旧 産業界のニーズに対応した教育改善・ 充実整備事業) ～平成29年度の実践報告～

目 黒 達 哉

はじめに

平成24年9月20日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の25大学で応募したところ選定された。選定されたことは、長年培って来た本学社会福祉学部の社会福祉教育が高く評価されたと思われる。なお、平成26年度でもってこの事業は無事に終了しました。しかし、この取り組みの重要性と大学の首脳部のご尽力により、平成27年度からは、引き続き大学の自己資金で運営されることになった。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されています。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が2006（平成18）年から提唱している。この

社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現している。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生きる力」の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神の社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

I. 事業の概要と目的

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努めている。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらすことができる。本取組の目的は、産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成ことである。そこで、本学部の学生が社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材となるための大きな柱は、1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化、および2. 地域・産業界との連携力の強化である〔（1）地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入、（2）産学連携授

業の実施、(3)地域の産業界と連携した実践的なインターンシップ」である。

具体的には次のようになる。

1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化

社会人基礎力のため、初期段階としては、「社会福祉入門」のテキスト作成し、初年次教育の基礎ゼミ等で活用する。

2. 地域・産業界との連携力の強化

(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

- ①福祉業界のニーズを把握のための意見交換会（精神保健福祉、介護福祉など）
- ②社会福祉現場のOB・OGとの連携による現状理解とニーズ把握「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」「若手OB・OG研究会」
- ③保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」
- ④特別講義「産業界のニーズに対応した社会福祉教育」（年4回シリーズ）
- ⑤産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」
- ⑥地域ニーズに応えるための「誰でも参加できるSST」
- ⑦地域ニーズに応えるための「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

(2) 産学連携授業の実施

社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

- ①キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ、②ボランティア論、③ボランティア活動、④国際ボランティア論
- ⑤NPO・ボランティアマネジメント総論、⑥NPO・ボランティアフィール

ドワーク

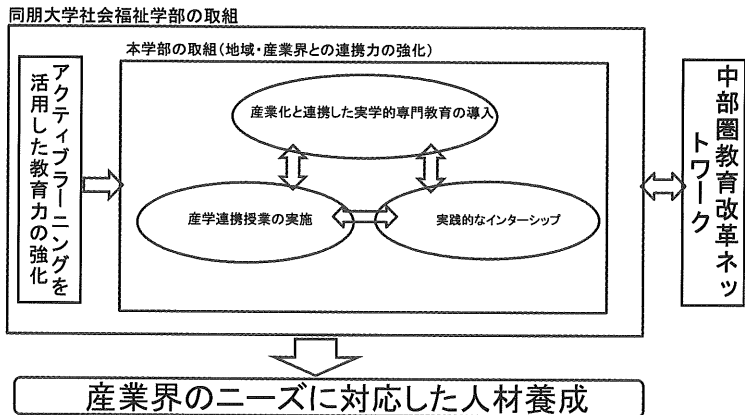
⑦傾聴活動論、⑧その他（実務家を招聘する科目）

（3）地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO法人、NGO団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターンシップに質的な変更を行う。

①インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

以上のような（1）～（3）の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。さらに、地域の・産業界との連携強化を推進し、その成果を検証するために、グループ内の分科会やグループ全体の産学協働連携協議会において本学の取り組みの成功体験、失敗体験を報告する。また、他大学の取り組みを共有し合う中で共通理解をし、さらなるチャレンジに向けて取り組みの質の向上を図る。



なお、平成27年度以降、大学で経費を予算化し継続している。

Ⅱ. 各事業の報告

<地域・産業界との連携力の強化>「1.」～「14.」

1. 「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉関係従事者の集い」

○目 的

テーマである『考えよう地域福祉～さまざまな視点・視野を持ってみつめる～』を具体的に考え・高め・交流する機会とした。

○内 容

今回の学会では、『考えよう地域福祉～さまざまな視点・視野を持ってみつめる～』というテーマでいろいろな視点から地域福祉を見つめ、考えた。さらに今、福祉の現場で専門職として誇りを持って働いている従事者の方々から発信していただき、福祉を学ぶ学生と参加者が「生きがいをもって勤め続ける魅力」につながる内容を学び、理解した。その次に、4つの分野で働く卒業生から、事例を提示して頂き、今回のテーマを私たちが実践するために何が必要なのかを学んだ。

このフォーラムは、同朋大学が平成24～26年度まで文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制事業」として実践してきたものを、平成28年度からは大学独自で予算化し、引き続き福祉業界における人材養成に取り組んでいる事業である。

日時 12月2日（土）

会場 成徳館502教室

内容 ①基調講演「考えよう地域福祉

～さまざまな視点・視野を持ってみつめる～」

講 師：林 博幸 教授

②学生研究発表

中神ゼミ『日本語は乱れているのか？』

～「若者ことば」のうつり変わりを通して考える～

汲田ゼミ『高齢者の生活を創るケア』

シンポジウム「考えよう地域福祉～さまざまな視点・視野を持ってみつめる～」

(コーディネーター：牧村 順一 准教授)

①教育分野	梶村 明人	津島市学校支援地域本部トータルコーディネーター、津島市社会教育委員
②医療分野	渥美有華(H21卒)	三重県立こころの医療センター 地域支援室医療福祉グループ
③福祉分野	松田 雄基(H23卒)	株式会社リレーション代表取締役 株式会社メイフェア代表取締役
④学生	ケシア・フィアニー(4年)	同朋大学社会福祉学部社会福祉学科 子ども学専攻

○成 果

- ・学生たちは、林先生の基調講演「考えよう地域福祉～さまざまな視点・視野を持ってみつめる～」での話の中でさまざまな視点から地域福祉を見つめ、考えることができた。
- ・学生たちは、研究発表を通じ、学生同士協力し合うことにより一つのことをやり遂げた。
- ・学生たちは、シンポジストだった卒業生の話から、地域福祉における福祉・教育専門職に求められることを理解することができた。
- ・これらの学びから学生は福祉実践基礎力を高めることができた。

2. 「実践力を高めるキッズカレッジ～学内実施型子育て支援活動～」

○目 的

- ・キッズカレッジを通して、豊かな感性やコミュニケーション能力を身につけ、保育実践力の向上を図る。
- ・0～2歳児の子どもに関わり体験を通して、保育体験や乳児保育の環境構成方法を学ぶ。
- ・キッズカレッジ開催のための準備活動を通して仲間とのコミュニケーション

力を高める。

○内 容・実 績

子ども学専攻では、学生の保育力の育成と地域貢献を目指して、年間約35回、地域の子育て家庭の参加者数約1,300名の学内実施型子育て支援活動を展開した。

○成 果

学生は、地域の親子、支援者、教員による協働活動の中で、共に楽しみ、共に学びながら幼い子どもを支える喜びを実感した。

3. 「キッズカレッジ実技講習会」

○目 的

キッズカレッジ実技講習会は、同朋大学社会福祉学部社会福祉学科子ども学専攻の学生が主体となって企画運営している「キッズカレッジ」の実践に向けて、実践力の向上を目的に学ぶ機会を確保するため実施している。

○内 容・実 績

2017（平成29）年度のキッズカレッジ実技講習会は2回開催した。

1回目は8月29日に小川公子先生と竹内恵子先生の2名を講師としてお招きして「エプロンシアターと保育に役立つ制作」を開催しました。学生の参加は46名で、材料からの制作と実演を実施した。

2回目は9月15日にむすび座を招いて「おおきなかぶ」と「泣きむし大男」を観劇し、終了後に実技や舞台小道具等について講義を聞いた。

○成 果

学生は、これらの実技講習を通して、子どもの反応や仕事への思いなどを学ぶこともできた。仕事をしていくうえで大切にしているおもいなど、プロ意識について学ぶことができ福祉実践基礎力が高まった。また、自分の将来について、立ち止まって考える大切さに気付いた学生もいたようであった。

4. 「福祉業界のニーズを把握のための意見交換会」

介護福祉士養成のための実習懇談会

○目 的

福祉業界の職員を招き意見を交換する。

○内 容

平成29年度に介護福祉士養成のために協力いただいたヒューマンケアコースの実習施設 約80ヶ所に参加を呼びかける。介護現場の質の向上のために施設側、大学側双方の意見交換会を実施する。

○実 績

平成30年2月13日（火） 15時30分～17時

実習施の現場指導者および管理職、大学の教員および実習指導担当者が参加した。

大学の挨拶に続き、実習指導の大学側教員の自己紹介。日頃の実習指導に対する謝辞を述べる。続いて施設側の大学への要望・学生に関する感想・学校側に対する質問をうける。質問に対する学校側の回答をし、学生をどのように育てるか、介護現場を向上するために必要なことについて意見がだされた。

○成 果

実習等で日頃からお世話になっている現場の職員との意見交換の場として双方に意味のあるものであった。

5. 「介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）」

○目 的

入学間もない学生を対象とし、施設の使命や、職員の大切にしていることを学ぶ。また、学外研修修了後の振り返り等、研修修了後の学びとする。

○内 容・実 績

介護福祉コースでは、2年次より開始される介護福祉実習の事前学習と、

施設のニーズに対応した社会福祉教育をかねて、毎年介護施設「あんしん生活蒼」にて研修している。本年度は10月3日に、事前学習として施設職員に学内にきていただき、「あんしん生活蒼」の生活の様子と紙おむつの介護技術を学んだ。10月11日に施設に行く学外研修。10月17日に事後学習。

○成 果

これらの体験を通じて、介護技術とコミュニケーション能力が高まった。また、学外研修による福祉現場の真剣さを学ぶことででき、今後の学びに大きく寄与していたものと考えられる。

6. 「誰でも参加できるSST」

○目 的

SST（Social Skills Training：社会生活技能訓練）は、主に対人関係を中心として「自分の気持ちや考えを上手に相手に伝える練習」をするプログラムである。

○内 容・実 績

SSTでは個人の問題をグループ全体で共有し励まし合い、支えながら練習をすすめる。「誰でも参加できるSST」は毎月開催している。

○成 果

SSTでは、個人の問題をグループ全体で共有し励まし合い支えあいながら練習し、福祉実践基礎力が高まった。

7. 「キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ」

○目的

社会福祉現場で活躍されている同朋大学社会福祉学部のOB・OGを招聘し、福祉業界のニーズに応える人材育成を目指す講義である。

また、福祉実践基礎力、福祉実践力を高める取り組むでもある。なお、福祉業界のみでなく、企業等で活躍されているOB・OGも招聘し視野を広めて

もらう。

児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、精神保健福祉、教育、国際、心理の各分野で活躍されているOB・OGを招聘し、講義を拝聴し、またOB・OGとコミュニケーションを図る場とする。

○内容・実績

①キャリア支援講座Ⅰ（前期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGが福祉職を志そうと思った動機や仕事の内容、学生時代をどのように過ごしていたかを中心に講義をしていただくこととする。

②キャリア支援講座Ⅱ（後期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGから現場が求めている人材について講義をしていただくこととする。

キャリア支援Ⅰ、Ⅱともに毎週水曜日の3限（13時～14時30分）に実施された。

○成果

OB・OGが福祉職を志そうと思った動機、仕事内容、学生時代どのように過ごしていたのか、そして求められる人材像など幅広くお話を聞くことができ、福祉実践基礎力が高まった。

9. 「国際ボランティア論、ボランティア論、NPOマネジメント論とフィールドワーク」

○目 的

文部科学省の就業力支援事業（2014年度で終了）をきっかけにして、2017《平成28》年度に引き続き、今年も、国内外における国際分野の問題などに焦点をあてながら、学生の主体性を生かすための授業や活動を同朋大学の事業として引き続き推し進める。更に、私たちを取り巻く自然や環境への関心や働きかける力行動の育成などを含む教育課題に重点を置きつつ、実

践力・行動力も身につける。

いく。

○内 容・実 績

実践学習として、地域にある国際機関（JAIC中部）を訪問し、世界が直面する諸問題やそれらに対する取り組みなどを、同世代の海外ボランティア経験者から学んだ。さらに、地域で働いたり観光で訪れたりする外国籍の人たちへの様々な聞き取りを通して交流を図った。新たな試みとして、今年は福祉実践英語の受講者も参加した。

○成 果

異なった講義での各々の学びを小グループごとに活かしあい、有意義な経験をし、福祉実践基礎基礎力が高まった。

10. 「ボランティア活動」

○目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内容

社会福祉法人若竹荘あけぼの作業所、名古屋市荒輪井保育園、名古屋市中村土木事務所の連携機関の協力を得て、知的障害者の生活介護事業、保育園児と学生による環境美化ボランティア活動を実践する。『事前学習・準備⇒ 実践（活動）⇒ 事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。いずれも実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の中で実施した。

○内 容・実 績

1) 知的障害者の生活介護事業（あけぼの作業所の利用者と学生の交流会）

「ボランティア活動」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

- ① 平成29年7月1日（土）10時～15時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。
- ② 平成29年12月9日（土）10時～15時、あけぼの作業所で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

2) ボランティア活動フォローアップの実施

平成29年12月16日（水）13時00分～14時30分、同朋大学において、今年度のボランティア活動の総括とコミュニケーション能力の向上のための学習会を実施した。

○成 果

学生は、連携機関やそこにかかわる地域の人々と共に協働・連携して社会貢献する体験と同時に実践活動の中で自分自身の課題や人間関係に直面する体験ができたことが大きな成果であった。したがって、福祉実践基礎力は高まったと考えられる。

11. 「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

○目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内 容・実 績

社会福祉法人名古屋市中村区社会福祉協議会中村サービスセンターの利用者（高齢者）が月1回、90分程度、来学する。職員も2名同行する。学生はボランティアとして、高齢者の大学見学をサポートした。内容は、名古屋音楽大学学生によるミニ演奏会、学内にあるカフェで高齢者と学生がコミュニケーションを図る。学生は『事前準備 ⇒ 実践（活動）⇒ 事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。学生ボランティアは実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の受講者の中から希望者を募り実施した。

中村区ディサービスセンターの利用者（高齢者）が月1回（平成29年 4月28日（金）14時40分～16時10分～平成29年12月12日（火）14時40分～16時10分）90分程度、来学、職員も2名同行。

ボランティア活動の事前準備・フォローアップの実施

活動①～⑪の当日お昼休み（12時30分～12時55分）に、事前打ち合わせと高齢者に渡すメッセージカードの作成を行った。また各回の終了直後に、学生のフォローアップを実施し、うまくいった点、課題点について発表し合った。

○成 果

この取り組みは、1年生から4年生までの参加がある。1年生、2年生は、一年を経過すると戸惑う姿は見られなくなり、福祉基礎実践力が高まった。3年生、4年生は経験を積んできた学生もいて、話の内容に幅が見られるようになり、福祉実践力が高まった。

12. 「傾聴活動論」

○目 的

傾聴に学ぶ。傾聴士とは何かについて理解し、その役割も知る。同朋大学認定「傾聴士」（一種）（二種）の資格取得に向けて、その理論と実践のあり方について理解する。

○内 容・実 績

ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論などさまざまな理論を援用して傾聴の態度を身に付ける。また、実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を聴く。さらには1回3時間の予定で高齢者施設に傾聴ボランティアに行く。

1) 受講学生 13名

2) 実施日時

平成29年4月12日（水）から平成29年8月2日（水）まで（6月21日を除

く)の水曜日1限(9時～10時30分)15回実施した。

また、平成29年7月5日(水)1限は、いなべ市社会福祉協議会の話し相手ボランティア(傾聴ボランティア)養成講座を修了し傾聴活動をしている2名の社会人特別講師と担当職員1名を招いて講義を拝聴した。

○成 果

学生は、ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論の学びを通じて、傾聴の技能を身につけ、また実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を拝聴し、傾聴力が高まった。

13. 「インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

○目 的

将来のキャリアに関連した就業体験をする。

協力機関での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識・スキル・態度・倫理観を体得する。各自の学習や進路適性を述べることができる。

○内 容・実 績

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等における就業体験を通じて、講義等で得た知識を確認するとともに実社会におけるルールを肌で感じ、社会で生きる上で必要な態度やスキルを身につける。さらに、今後の学習方針を自ら確かめ、進路適性を確認する。

インターンシップ科目は、協力機関での30時間～40時間の従事時間のほか、事前・事後指導を含めた学習をする

①ガイダンス、②学生の関心、適正などから協力機関を決定する、③申込書の提出、④インターンシップ計画書の作成、⑤事前指導、⑥挨拶、下見、⑦協力機関での就業体験、⑧教員等の巡回指導、⑨事後学習

インターンシップは、目的に応じていくつかの類型に分けることができるといわれている。大別すると、(1)職場体験型、(2)課題解決型、

(3) 実務実践型、(4) 採用直結型という分け方がある。

社会福祉学部では社会福祉現場実習、教育実習やボランティア活動などがインターンシップに該当すると言える。社会福祉現場実習、教育実習は「(3) 実務実践型」に該当し、ボランティア活動は「(2) 課題可決型」に該当すると考えられる。本学では、インターンシップをこのような基本的な考え方に基づいて参加率の現状を把握すると、約30%である。

しかし、文部科学省がインターンシップの基本的な考え方は、実習を除くということである。この考え方で参加人数を把握すると11名ということになる。学生は実習で手一杯で、実習以外のインターンシップまで参加する余裕がないと考えられる。

○成 果

参加学生は、将来のキャリアに関連した就業体験をし、インターンシップ先での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識、スキル、態度、倫理観を体得することができ、福祉実践基礎力が高まった。

14. 「その他（実務家を招聘する科目）」

○目 的

主に3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、子ども学専攻：総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）において、ゼミ担当者がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘する。そしてスムーズな就業につなげるための一助とする。

○内 容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等の第一線で働いている実務家に就業動機、職務内容などの講義を拝聴するとともに、学生が実務家とコミュニケーションを図ることにより、ゼミの学習内容を深める。

○実 績

平成29年4月12日から平成30年1月17日にまでの講義期間の主に水曜日

の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、5名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

○成 果

主に3・4年生のゼミにおいて、ゼミ担当教員がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘し、スムーズな就業につなげる一助となった。

Ⅲ. 同朋大学社会福祉学部福祉実践基礎力とアクティブラーニングについて

○目 的

同朋大学社会福祉学部では、豊かな教養を培って人間と社会に関する心理を探究し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っている。そこで、通商産業省が提唱した社会人基礎力をもとに、平成24年度より社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案し、毎年測定して教育に反映させるよう努めている。また、教育効果を高めるために、教科内容に合わせてアクティブラーニングの手法も取り入れるよう努めている。

○内 容

本学部の目指す人材を育成するために、初期段階としては基礎学力や専門知識などの育成を図っていて、さらに福祉実践基礎力を目標にして教員や学生を測定しながら育成を進めている。この福祉実践基礎力は、「心が動く力（主体性、協働性、目的性）」、「じっくり考える力（課題分析力、計画力、気づき力）」と、「共に生きる力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力）」の3つの能力から構成されています。前者2つは個人的能力で、最後のものは社会的能力になる。

この福祉実践基礎力を測定するために、学生用には「同朋大学福祉実践基礎力診断票」を作成し、年度末に1～4年生の学生に「学びあい×キャリアポートフォリオ（webポータルサイト）」よりweb経由で入力して集計している。また、教員には福祉実践基礎力とアクティブラーニング実施状況のアンケート用紙を配布して記入してもらい、集計している。

○実 績

福祉実践基礎力は、社会福祉学部の学生に必要な能力を表す一つの指標として考えられたものであるが、各学年とも平成28年度は一旦下がったが、平成29年度は急に高くなっている。過去3年間では、3年生を除けば、最高の値になっている。もちろん数値が上下することはあるが、平成29年度は、いままでの取り組みが学生たちに何らかのインセンティブを与えてきたからだと推察される。

福祉実践基礎力の学年別平均点の推移(平成27～29年度)

	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力		
	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度
1年生	3.90	3.47	4.08	3.64	3.24	3.79	3.62	3.30	3.80
2年生	4.02	3.37	3.98	3.58	3.25	3.67	3.67	3.22	3.72
3年生	4.23	3.21	3.96	4.04	3.05	3.63	4.06	3.08	3.72
4年生	3.88	3.59	4.13	3.57	3.27	3.82	3.69	3.43	3.90

(注)数値の範囲は1～5で、5に近いほうが各々の力は強い。

次に、福祉実践基礎力と専任教員の育成したい資質との関係をみてみよう。教員の育成したい資質に関係の深い能力は、「じっくり考える力」、「共に生きる力」、「心が動く力」の順になる。そして、能力要素でみると、教員は、「状況把握力」を最も育成したく、次に「課題分析力」、「気づき力」、「柔軟性」を育成しようと考えている。

教員が育成したい学生の資質(能力要素)

能力 能力要素	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力						
	主体性	協働性	自主性	課題分析力	計画力	気づき力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス把握力	ストレス解消力
よく当てはまる	8	7	9	10	9	10	7	7	10	14	6	4	3
どちらかというと当てはまる	6	8	6	5	6	5	7	7	4	1	9	10	11
どちらでもない	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1
ほとんど当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全く当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

最後は、教員のアクティブラーニングの実施状況と学生の能動的な学びとをまとめたものが下表になる。振り返り、学生参加型授業、プレゼンテーション、グループワークなどを取り入れている教員が多くいる。いずれのアクティブラーニングでも、学生は能動的に学ぶようになっている。特に、プレゼンテーションや共同学習を取り入れた授業では、学生が能動的に学ぶようになっている。

アクティブラーニング実施状況と能動的な学び

	実施教員数	学生が能動的に学ぶようになった				
		良い	やや良い	どちらでもない	あまりよくない	良くない
学生参加型授業	14	5	9	0	0	0
共同学習を取り入れた授業	12	6	6	0	0	0
PBL(課題解決型学習)	11	5	6	0	0	0
PBL(プロジェクト型授業)	10	5	5	0	0	0
グループワーク	13	5	7	1	0	0
ディベート・討議	10	3	4	2	1	0
フィールドワーク	9	8	1	0	0	0
プレゼンテーション	14	6	6	2	0	0
振り返り	15	6	8	1	0	0

○成 果

福祉実践基礎力を考案したことは、学生や教員に具体的な学びや育成の方向性を与えてきた。そして、具体的な能力や要素を掲げることによって、学

生や教員の目指す教育内容を、人材育成という側面からわかりやすく理解できたと思う。この方向性と教育方法が絡み合って、学生たちのインセンティブが向上しているようである。

おわりに

同朋大学社会福祉学部では、平成22年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学生の就業力育成支援事業」に応募し、「持続可能な福祉実践力を高める取り組み」というテーマで採択された。引き続き平成24年度から平成26年度においては「産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業」に採択され、中部地区23大学の参加校として、東海Bチームに所属し、「アクティブラーニングの活用」、「地域連携事業」を推進し、福祉実践基礎力、福祉実践力の向上を目指して事業を推進してきた。その後、中部圏教育改革ネットワークの一員として参加校との連携を継続している。

平成27年度からは大学において自己資金を投入し、3年間事業を継続している。大学関係者のご理解とご協力に感謝の意を表したい。今回、報告したように、アクティブラーニングを活用した教育内容、地域・産業界との連携力の強化を図る中で、学生の福祉実践基礎力が高まったと考えられる。今後ますます学生の福祉実践基礎力が高まるように、来年度も教育プログラムの質を高めたいと考えている。一昨年度から大学の自己資金を投入し、今年度も終えることができた。教職員の皆様に深い感謝と敬意を表したい。

注記

- 1) アクティブラーニングとは、授業者が一方的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL（Problem-Based Learning/Project-Based Learning）など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

- 1) 平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
- 2) 同朋大学社会福祉学部 平成29年度大学教育改革推進事業 同朋大学社会福祉学部教育プログラムの概要,2018.
- 3) 同朋大学社会福祉学会 S学会ジャーナル V o l .19,2018.

参考文献

- 1) 和木康光『同朋和敬 ― 同朋大学のあゆみ ―』中部経済新聞社,2002.
- 2) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008.
- 3) 角方正幸・松村直樹・平田史昭（共著）『就業力育成論 実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版,2010.

謝辞

この実践報告をまとめるにあたり、産業界ニーズ委員会の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、学務部の教職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

（本学教授：カウンセリング論、ボランティア活動）